

[研究論文]

W.W. コベットの「ファンタジー Phantasy」 ——20世紀初頭のイギリス音楽の一断面

西阪 多恵子

はじめに

20世紀初頭、イギリスのアマチュア音楽家 W. W. コベット (1847-1937) は、コンクールや委嘱、著述を通じて室内楽の創作や演奏を推進した。とくに17世紀イギリスの「ファンシー」に触発されて提唱した phantasy¹の作曲は「若い作曲家の通過儀礼」(Seddon 2011: 156)といわれるほどのブームとなった。イギリス音楽の創作や作曲活動への刺激については先行研究で論じられている (Maw 2010, Seddon 2011)。だが phantasy の提唱の目的は室内楽の普及でもあった。本稿では、phantasy の発端に創作と普及という二つの目的があることに着目し、そのうえでコベットと当時の音楽家たちが phantasy の形式やファンシーとの関係をどのようにとらえていたのかを考察する。この着目と考察によって、イギリスの音楽状況における phantasy の提唱の意義を明らかにしたい。

1. コベットとその活動

コベット (Cobbett, Walter Willson 1847-1937) はロンドン近郊の生まれ。アマチュアのオーケストラの首席を長年務め、室内楽のヴァイオリニストとしての活動を終生続けた。実業家として、スカンジナビア・ベルティング社の共同創設に成功し、60歳で退職。それ以後はとくに室内楽のパトロンとしての活動が著しい。

その一つが1906年に始まる一連のいわゆるコベット・コンクールである。コベットは1920年まで7回の室内楽作品コンクールを実施し、そのほとんどでさまざまな編成による室内楽の phantasy を課題とした²。また同じ頃、それぞれ異なる編成による室内楽の phantasy を作曲家十数人に委嘱した。入賞作と委嘱作品の多くが出版されている³。1920年以降は、王立音楽大学の学生を対象に、イギリス作品の演奏と phantasy の作曲に力点をおく室内楽の賞を設けた。1924年には室内楽の貢献に対する賞を設立し、作曲家、興行者、パトロンなど多様な働きの手をその対象とした。またイギリスのヴァイオリン製作者を対象とする製作コンクールを2回実施した。

著述関連では、室内楽事典 *Cobbett's Cyclopedic Survey of Chamber Music* 2巻 (1929-1930年出版) および、雑誌 *The Music Student* の付録として *Chamber Music: A Supplement to The Music Student* (1913-1916年隔月刊) を自己出資により、編集発行した。前者は国内外から145人の寄稿者を集め、自ら多くの項目を執筆している。共に当時の室内楽の状況や音楽観を伝える文献である。その他グローヴ音楽事典や音楽誌上の執筆、音楽学校など関係団体における講演も多い。また、自ら準会員でもある女性音楽家協会⁴にイギリスの室内楽楽譜百数十点を寄贈し、Cobbett Free Library として一般の利用に供した。同協会においても弦楽四重奏の優秀演奏に対する賞を

設けるなど室内楽の向上に努めた。

2. Phantasy

2-1 Phantasyの発端と当初の目的

コベット・コンクールの最初の2回は音楽家組合 (Worshipful Company of Musicians 以下 WCM)⁵の主催によって行われている。コベットによれば、phantasyの発端は、1905年、WCMの会員となったコベットに対する「ギルドの名において音楽のために何をなすか」という内部の期待であった(Cobbett 1915: 27)⁶。その共同体精神 (a communal spirit) に共感したコベットは、自ら深く関わってきた室内楽について考えあぐね、「妙な事実」に気づく。それは、室内楽は真の音楽家にとって最高の価値があるのに、巷の人にとっては最低あるいはないも同然ということであった⁷。ベートーヴェンの弦楽四重奏曲やシューベルトの室内楽は普通の聴き手 (average listener) には長すぎる。そこで、室内楽の普及のためには演奏時間の短い形式の導入がよいだろうと考え、イギリスの作曲家を対象に、「あらゆる形式の中で最も難しい」弦楽四重奏による短い作品のコンクールの企画を申し出た (ibid. 27-29)。

同年5月、WCMの評議会においてこの申し出は快諾された。WCMはこのコンクールの目的を「弦楽四重奏を少し変えた形で一般の聴衆に広め、室内楽の作曲家に新鮮な機会を供する新しい芸術形式をもたらすよう努めること」(WCM 1905: 119)と記している。芸術音楽を一般に広めるという啓蒙的な意図は、「ポップス」のような低価格のコンサートなどにみられるが⁸、その多くはいわゆる名曲鑑賞が中心である。室内楽の普及と新しい芸術形式による室内楽の創作という二つの目的を同時にめざした点でphantasyコンクールは特徴的な企画であったといえよう。室内楽の普及のために「短い」という条件が生じた一方で、「最も難しい形式」である弦楽四重奏という課題に芸術性への要求がうかがわれる。

7月初めにはコンクール開催のチラシが自国の作曲家を対象に出された。それには上の目的とともにコンクールの主題が次のように定義されている。「弦楽四重奏の形態による短い“Phantasy”。各パートは同等に重要であり、長さは12分を越えるべきではない。切れ目なく演奏されるべきだが、テンポとリズムの異なるさまざまな部分から成ってよい」(1915: 28)。同年末の締切までに67曲の応募があり、コベットは一次選抜のためにほぼそのすべてをプロの演奏家の協力を得て自ら演奏した。翌1906年4月、選ばれた8作品の審査の結果、第1位(コベット賞50ポンド)はハールストーン (Hurlstone, W.Yeats) に決定し、他5名が入賞した⁹。

2-2 Phantasyとファンシー

最初のphantasyコンクール開催を告げる音楽誌には次のような文がある。“Phantasy”という言葉はファンシー (Fancy) に大変似ているので、WCMの意図は古風な形式と古風な情感の復活にすぎないと思われるだろう」(Anonymous 1905a: 35)「昔のイギリスのファンタジーが現代の

発展の可能性を提示する典型的な形式として示唆されよう」（Anonymous 1905b: 455）。

コベットによれば、phantasy は「昔のイギリスのファンシーの現代的類似物（the modern analogue）」（1915: 27）である。ファンシーは16世紀末から17世紀にかけてイギリスで一世を風靡した模倣の手法を主とする器楽曲であり、ファンタジーと同じ意味で用いられた。リュートやヴァージナルの独奏曲、コンソート・オブ・ヴァイオルなどの合奏曲が多く、宮廷や大学、多少裕福な一般家庭にいたるまで、さまざまな場で演奏された。

Fantasy という言葉は「奇想、気まぐれ、空想的な創案」を意味する¹⁰。音楽に関しては15世紀末にこの用語が現れ、言葉から自由な、想像力に富む器楽の意味合いで用いられるようになった。初期のファンタジーは対位法的手法を主とし、リチェルカーレなどとほとんど区別されないが、時代により、その形式的様式的特徴は多種多様である。イギリスでは16世紀末から合奏によるファンタジーがとくに盛んとなった。1597年、モーリーはファンタジーを器楽の中で最も重要な音楽とし、模倣主題を最高の形にするための作曲者の自由について記した。1667年、シンプソンはこれを基本的に引き継ぎ、コンソート・オブ・ヴァイオル用のファンシーの重要性と卓越性、作曲者の自由な創意工夫をうたった。そして、コベットの同時代者で古楽研究の草分けドルメッチによれば、「イギリスのファンタジーが最も表現の自由度が高く、傑出していた」（Dolmetsch 1929: 296）。

イギリス初期音楽の研究は早くから始まっており、1840年代には古楽協会によって16-17世紀の音楽の楽譜が19巻にわたって刊行されている。その中にはギボンズのヴァイオルのためのファンタジーや、ファンシーを含む鍵盤曲集『パーセニア』がある。ファンシーの研究はとくに1889年のドルメッチによる楽譜と古楽器の再発見を契機として進み、1910年代後半から1920年代にかけて関係論文や楽譜が刊行されるようになった。

コベットは、フレデリック・ブリッジ（Bridge, John Frederick）による一連の公開講座（1890-1892）でファンシーを聴いた経験を次のように記している。「O. ギボンズの3声の作品は教会音楽の厳格さが強く、ファンシーの書き手にふさわしい想像力が他の作曲家ほどではない…だが、レイヴンズクロフト、ディアリング、ウォード、ローズ、ロックなどのファンシーは私にとって啓示であった…構造と調性が素朴で、ほとんど展開がないことは、その時代を考えれば驚きではない。だが何世紀も経たわが国の作品として大変興味深いため、ファンシーの現代的類似物といえるいわゆる phantasy を若い作曲家たちにさまざまな編成で委嘱した。もちろん現代の語法で考えられ、ファンシーの構造的欠陥のないものである」（1929: 385）。コベットはこの引用箇所の前に、公開講座におけるブリッジの言葉「ファンシーは今日の室内楽の四重奏や三重奏の対応物（counterpart）」を引用している。つまり、合奏によるファンシーは演奏形態において今日の四重奏や三重奏に対応するが、ファンシーと phantasy は、作品の語法や構造の点で異なる。これにいくらか類似した表現は、すでに作曲家ウォーカー（Walker, Ernest）による次の一節にみられる。「Phantasy は比較的短い協奏風室内楽曲である限り、昔のファンシーの今日の類似物である。ただし、音楽的に現代のものを少し変えた形であって、過去のものの復活ではない」（1915: 18）。こ

の「音楽的に現代のものを少し変えた形 **modification**」はまた、WCMによる当初の目的「弦楽四重奏を少し変えた形」（本稿2-1参照）を連想させよう。

「現代の語法」による「音楽的に現代のもの」の変形として **phantasy** は考えられ、受けとめられた。その現代とのつながりは、次に述べるように、主にソナタ形式との関連によって示されている。

2-3 Phantasy とソナタ形式

Phantasy はその出現以降、作曲家や音楽評論家などによってしばしば言及され、その過程でソナタ形式に照らした解釈や規範が示された。「この名称 [**phantasy**] が表すのは、切れ目なく続く（テンポと拍子は時折変化する）一楽章の弦楽合奏曲で、大抵の古典的作品より演奏時間が短く、“古典的”形式の構造諸法にとらわれない。そうした諸法の代わりに命じられる、あるいは少なくとも薦められるのは以下である。ソナタ形式の展開部が遅いテンポの楽章に置き換えられ、そこにスケルツェンド楽章が含まれてもよい。いずれにせよ、最初の部分の主題的素材との論理的関係は維持される。楽章の最初の部分の特徴に戻るが必ずしも明確な反復ではなく、フィナーレとして展開されたコーダが加わる。このように基本的なアウトラインは保たれるが厳格なものではない」

(Fuller-Maitland 1910)。この文脈において「古典的 (classical)」形式とはソナタ形式の言い換えであろう。「主題的素材との論理的関係」もまた当時のソナタ形式観、すなわち、ソナタ形式の調性的和声的關係に比して、主題関係やその素材の展開を重視する19世紀後半以降の傾向と関連しよう。コベットのファンシーおよび **phantasy** 論にもソナタ形式が参照されている。「ファンシーは無形式ではない。短縮されたソナタ形式といえるものもあり、すべて1楽章だがテンポは変化する」(1929: 385)。また、**phantasy** の創案に関して「オーケストラでは交響曲のほかには序曲や交響詩があるが、室内楽では一つの形式だけが重要とされている…新しいタイプが必要…取って代えようというのではない…ソナタ形式は絶対音楽の愛好家にとって音楽の構造に最も役立つものであり続けるだろう。望むらくは新しい習慣が昔からのものと相並ぶように」(1911b: 242)。ファンシーにはほとんど展開がなく、構造的欠陥がある(1929: 385)一方、「**phantasy** はファンシーの発展だがより論理的」(1912: 105)とするコベットの **phantasy** 像もまた潜在的なソナタ形式への参照といえよう。

王立音楽大学の作曲教授スタンフォード (Stanford, Charles Villiers) の門下生には **phantasy** コンクールの入賞者が多い。しかし彼は **phantasy** の作曲は易しそうにみえて決してそうではないと忠告し、それを多楽章ソナタ全体との関係で説明する。「**Phantasy** の形式はソナタ形式作品の全楽章を一つに凝縮する。…ソナタの3ないし4楽章のこの縮小調整は規定されるすべての要素を含み、しかもどれもその割り前を越えてはならない…」(Stanford 1911: 162)。

ソナタ形式あるいは多楽章ソナタの楽曲構成は、言葉による概念として、また音楽作品として **phantasy** を具体的に特徴づけていった¹¹。コベットもそれらを読み、演奏し、聴き、あるいは研

究者や音楽家との交流を通じてその概念の構成に参与したであろう。

「(コベットは) ソナタ様式に典型的な4楽章ではなく、単一構造形式の室内楽曲創作を鼓舞するための賞を設けた」(Tovey 2001: 85) (初出1916年)。「コベットは簡潔さを変化と結びつけ、構造の自由を明確な形式原理と結びつける形式を求めた。… これら古い形式が、主題処理の事柄において、大きなソナタ形式の3ないし4楽章を小型に結合することによって今日に持ち出された」(Antcliffe 1920)。これらはそれぞれの著者のphantasy解釈でもある。Phantasy提唱の当初、ソナタ形式との関係をコベットがどのように考えていたのかは測りがたいが、ソナタ形式が「ブラームスの後、ゆるやかに構成されたモデル、古典の模倣が自由にできるパターンを供した」(Rosen 1988: 403) とすれば、phantasyはその中のあるパターンを示したともいえよう。

2-4 “Phantasy”の綴り、標題、「形式」

Phantasyは、16-17世紀のファンシーおよび現代のソナタ(形式)と結びつく半面、同時代のある種のファンタジーと意図的に区別されている。「この綴りについては… 真正の古い英語で時折現代も使われ、あの一連のもの[コベットの提唱によるphantasy(西阪注)]として見分けるのに役立つ。多分、Fantasyの方がよいのだろうが、私の好みでいえばそれはFantasiaに似すぎている。Fantasiaはかつて高貴な言葉で想像力をかきたてたが、現代では誤用の多くの例で損なわれてしまった」(1915: 28)。コベットは「誤用」の例を挙げていないが、グローヴ音楽事典初版の項目“Fantasia”によってその趣旨はある程度推測できよう。「近年… この名はいくぶん評判を落とし、人気ある旋律をつなぎ合わせて指先の技巧をみせびらかすだけの華やかなパッセージからなる俗悪なものにも用いられるようになった」(Parry 1878/1889: 503)。また、同事典第2版によれば、それらは「真の音楽とほとんど関係がない」(Parry 1904: 7)。

だが、コベットはphantasyという綴りの根拠をこのように示す一方、この綴りに固執してはいなかったらしい。例えばコンクール初回の入賞作品6作は“Phantasie”あるいは“Fantasie”の標題で出版されている¹²。さらにコベットにとっては、次のように、どのような綴りの「ファンタジー」でもない「phantasy」すらあるらしい。1918年、コベットは実施中のヴィオラのためのphantasyコンクールが一連のコンクールの最後となるよう、として次のように説明した。「これ以上ファンシーを復活させる必要はないと思う… 組曲(suites)、田園詩曲(idylls)、ノヴェレツテン、カプリッチョ、ソナタや1楽章のトリオはすべてファンシー、すなわち我々の先祖が好んだものの類似物であり、なんと呼ばれようと問題ではない」(1918: 63)¹³。

また、コベットによれば、phantasyには「誤用」されたファンタジーと異なり「彫刻にギリシャ人が見出した美の最高の理想の表現を室内楽に見出した巨匠たちの影響のしるしが示されるだろう」(ibid. 27)。だが、ここで含意されているのは必ずしも室内楽の巨匠たちの「ファンタジー」作品ではない。ギリシャの美は古典主義と結びつく。関連するのはむしろ、その弦楽四重奏曲がコベットの室内楽への開眼を導いたベートーヴェンを初め、この曲種の確立と進展に貢献した古典派

の作曲家たちであり、その代表的な室内楽作品すなわちソナタ形式を基盤とする作品であろう。実際、コベットはベートーヴェンの弦楽四重奏曲作品131嬰ハ短調を **phantasy** と述べている(1914: 87)。

コベットにとって重要なのは、**phantasy** という標題ではなかった。次の二つの文は共に **phantasy** に関するコベットの考えの代表的な例であろう。「**Phantasy** という言葉が示唆するのは決定的なものではなく、形式 (**form**) に関する自由のみである」(1915: 30)。「**Phantasy** に求められているのは単一楽章での想像力の自由な戯れであり、どのような形 (**shape**) であれ、形でありさえすればよい」(1930: 217)。元来、作曲者の自由を守る「ファンタジー」は、楽曲構成上の特定の形式ではない。その意味でこの二つの文は **phantasy** を音楽のファンタジーの歴史に位置づけるとともに、**form** と **shape** という言葉の類似した用法から、コベットが形式 (**form**) という言葉を、楽曲形式を越える広い意味で、ファンタジーの語意の含蓄をもって用いていたことをうかがわせる。そしてそれは、「ファンシーと同様に、**phantasy** は形式を確立するのではなく、あるタイプを発展させた」(Colles 1927) といわれるように、ファンシーに触発されたものであったであろう。コベットは「“ファンシー” という名称には形式主義からの自由が示唆される」(1911a: 433) と述べた。**Phantasy** で求められたものも形式主義から自由な「形式」であり、「明確かつ適切な形を示しながら、新しくかつ完全に個々の応募者が制御する芸術形式」(Tovey 2001: 85) であった。Tovey によれば、**phantasy** はそれゆえに優秀な若い音楽家たちを魅了し創作に向かわせたのである (ibid.)。

2-5 ファンシー／phantasy 演奏の場

1904年7月、WCM 設立勅許300年記念の古楽博覧会¹⁴において、コベットはヴァイオリン族に関する講演を行い、次のように語った。

「エリザベス女王の治世には紳士^{ジェントルマン}はみなチェスト・オブ・ヴァイオリンをもち、合奏用に短い“ファンシー”が作曲され、私的にも公的にもあらゆる機会に演奏されました … こうした“ファンシー”の復活を見たいものです。元の曲ではなく … 弦楽四重奏やピアノと弦楽器のための現代の“ファンシー”を」(1911a: 433)

先述のように、合奏によるファンシーは現代の四重奏等と演奏形態のうえで類似する。その半面、「復活」という言葉は、ファンシーの時代には存在し、コベットの時代には失われたものを示唆する。ここではそれは時代で異なる音楽の場、その場に集う人々の関係や背景であろう。300年前には夥しい数のファンシーがさまざまな場のために書かれ、演奏された。コベットの言葉には、その光景が、大コンサートホールでは得がたい演奏者と聴き手の親密な関係や内輪で演奏を楽しむ場として彷彿する。

コベットはこの翌年、WCMの会員となり、ほぼ同時に **phantasy** コンクールへと動き出した。それはファンシーのさまざまな面(音楽形式、ファンタジーの連想、演奏形態、音楽の場や人々の

関係等)の呼び起こしを通じて、室内楽を普及させると同時に、新しい芸術形式をもたらそうとするものであった。コベットの語るファンシーの光景にはその原点が示唆されているように思われる。すなわち、phantasyの構想には、新たに書かれる室内楽曲によって、より多くの人々が聴くだけでなく、演奏に加わることが目ざされていたのではないだろうか。

1917年の民謡に基づくphantasyコンクールの際、コベットは「並ならぬ技巧をもつプロのグループだけが演奏できる作品は、イギリス室内楽を聴衆にも内輪で演奏する者にも広める目的で平易さと直裁さをねらうコンクールには全く不適當」(1916: 70)と述べた。その他のphantasyコンクールについて同様の趣旨があったとはいいがたいが、コベットはさまざまな機会に、アマチュア向けの室内楽レパートリーの拡大を求めている。編著書の室内楽事典 *Cobbett's Cyclopedic Survey of Chamber Music* の序文では、執筆者としての自らの立場を「アマチュアの典型 (amateur as type)」(1929: v)と明言し、他の執筆者による作品様式論中心の諸項目に、しばしば一般的なアマチュア演奏家にとっての技術上の問題や難易度、身体的快樂をも含む演奏の楽しさについて補記した。また、コベット・コンクールの初回(1906)と第4回(1915)のそれぞれ「各パートが同等に重要」「二つのヴァイオリン・パートが同等に面白く重要」という条件は弦楽四重奏の演奏者のチームワークや楽しみという観点によるものでもあった(1929: 254)。コベットにとって、ある作品が高度な演奏技術を持たない者に演奏可能か、またそのための努力と時間に価するかということ、作品の評価基準の一つとなり得、特筆すべきことであったようだ。フランク・ブリッジの初期の室内楽曲は「プロのみならずアマチュアにとっても新発見であり、貴重なレパートリーとなった」(1929: 195)のであり、ブリッジと共に初回および第2回コベット・コンクールの入賞者であるジェイムズ・フリスキン(Friskin, James)のヴァイオリン・ソナタは「アマチュアの注目に値する」(ibid. 438)。Phantasyコンクールの当初の目的は、明文化された限りでは「一般の聴衆」と「室内楽の作曲家」に向けられており、演奏への言及はないが、コベットにはphantasyによってアマチュアの室内楽演奏を推進したいという思いもあったと考えられよう。

一般の聴衆に対してあるいはアマチュアの演奏として、室内楽を推進することへの関心はコベットやWCMに限られていたわけではない。例えば「このコンクールがイギリスの出版者を一般にわかりやすい形式 (accessible form) の作品の出版に向けて刺激したことは疑いようもない」(Fuller-Maitland 1910)、また「コベットの諸コンクールは…室内楽を時代の音楽思考が必要とするものに直接関係づけた…第一に必要なことは室内楽の普及であった」(Scott 1920)という記述から、そうした意識が音楽界においてある程度共有されていたと推察されよう。

おわりに

Phantasyは二つの目的、すなわち室内楽の普及と、新しい芸術形式による室内楽の創作とを同時にめざして始まった。当時の音楽家たちは、とりわけ後者に強い関心を示し、多くの作品が書かれ、主にソナタ形式との関連でphantasyが論じられた。だが、室内楽の普及という目的もまた、

曲の短さをはじめ、一般の聴き手あるいは聴き手と演奏者双方にとって好ましい点を通じて、**phantasy** の「形式」構成に関わったといえるのではないだろうか。いいかえれば、二つの目的は、アマチュアないし一般音楽愛好家の視点が、イギリス作曲界に創造的に関与するという仕方で互いに結びつく。ファンシーは、アマチュアも含むイギリスの音楽創造の場における典型的な音楽として、二つの目的に適うモデルであった。**phantasy** はその「現代的類似物」である。それはイギリスの音楽状況において、作曲家のみならず、アマチュアや潜在的な音楽愛好家も音楽創造に関わりうることの象徴であり、その提唱はそうした音楽創造を促すものであったのではないだろうか。

注

- 1 本稿ではコベットの提唱によるファンタジーを **phantasy** と表記する。コベットは他のファンタジーと区別してこの綴りを意図的に用いている（本稿2-4参照）。
- 2 例外は第3回（1910年開催、以下同様。本稿では審査結果年を開催年とする。開催告知はいずれもその前年）で、ソナタの国際コンクールであった。第4回（1915）はソナタ、組曲または **phantasy** とされ、その他の回はすべて **phantasy** が課題である。そのうち第5回（1917）および第7回（1920）はそれぞれ、民謡（イングランド、ウェールズ、スコットランド、アイルランドの4カ国の内いずれか作曲者が属す国の民謡）によること（第5回）、舞踊ファンタジー（第7回）と主題が課されている。演奏手段は、弦楽四重奏（第1回および第4回）、ピアノ三重奏（第2回1908）、ヴァイオリンとピアノ（第3回）、弦楽四重奏またはピアノ三重奏（第5回）、ヴィオラとピアノ（第6回1918）、ピアノと弦楽合奏（第7回）。
- 3 今日比較的知られている **phantasy** としてフランク・ブリッジのピアノ四重奏曲（1910）、ピアノ三重奏曲（1908）、ジョン・アイアランドのピアノ三重奏曲（1908）などがある。Maw は入賞作や委嘱作品他、室内楽の **phantasy** 約80曲のリストを挙げている（Maw 2010: 116-121）。
- 4 女性音楽家協会（Society of Women Musicians）：1911年に設立されたイギリスの団体。男性は準会員として入会を認められ、イギリス現代音楽の推進などのうでで協働した。
- 5 Worshipful Company of Musicians：16世紀のギルドから発展した音楽振興団体。コベット・コンクール第1回（1906）及び第2回（1908）には他のWCM会員提供による賞も授与された。その後もコベットは室内楽振興活動全般にわたってWCMと深い関わりを持ち、1928年度にWCM理事長（Master）を務めて以降、評議会の一員としての役割を終生担った。
- 6 以下、引用・参考文献について著者名の記載のないものはすべてコベットの著述による。

- 7 「巷の人」(the man in the street) がコベットにとってどのような人々であるか明確ではないが、文脈によってはこの言葉は最貧困層を含むと考えられる(例えば 1930: 93)。一方、コベットは若い時ドイツで音楽愛好家たちに接し、紳士^{シフトルマン}の関心が音楽ではなく専らスポーツにあるイギリスと対照的な印象を受けたと述べている(1929: 284)。コベット自身には多くのアマチュア音楽仲間がいた。
- 8 ロンドンでは 1859 年に開始された Popular concerts が通称 Pops として人気を博し、1904 年まで 1602 回開催された。また、1887 年開始の The South Place Concerts は Conway hall での室内楽シリーズとして 2012 年現在も続いている。
- 9 初回の審査員は作曲家の Alexander Mackenzie を長にヴァイオリニスト Alfred Gibson, WCM 会員の Hermann Sternberg およびコベットの 4 名。その後、数十名の音楽家が審査を務めた回もある。
- 10 Fancy は fantasy の短縮形である。語源はギリシャ語であり、原意は 1 現れ appearance ギリシャ後期とくに幽霊幻 spectral apparition, phantom 2 感覚的知覚の心的過程や能力 the mental process or faculty of sensuous perception 3 想像力 the faculty of imagination . Phantasy は古代ギリシャ学の復興後、しばしば用いられたつづりである。その意味合いはギリシャ語源に影響され、fantasy は奇想、気まぐれ、空想的創意、phantasy は想像(力)、幻想観念として区別される傾向がある (*The Oxford English Dictionary*, 2nd ed., ed. J.A. Simpson, E.S.C. Weiner, New York: Clarendon Press, 1989, s.v. "Fantasy")。
- 11 Walker はコベット・コンクールの入賞および委嘱作品から 20 曲の phantasy について各々の構造等諸特徴を論じ、前出 Fuller-Maitland および Stanford による phantasy 論に適合する実際の phantasy 作品は少ないと指摘している (Walker 1915: 19-20)。
- 12 初回の入賞作品のうち Hurlstone, Bridge, Friskin, Wood, Warner の各作品は標題を Phantasie として Novello 社より、Holbrooke の作品は標題を Fantasie として Sidney Riorden よりそれぞれ 1906 年から 1908 年にかけて出版された。手稿譜は Holbrooke について不明の他はいずれも Phantasy である。
- 13 実際には、このコンクールの後、1920 年に最後のコンクールを行っている。(注 2 参照)
- 14 この博覧会は約 2000 点の古楽器や楽譜等が展示され、会期 3 週間の来場者数が延べ 6000 ないし 8000 人に上る大規模なものであった。その間行われた古楽に関する 17 の講演会も多くの聴衆を集めた。コベットの講演はその一つである。

<参考・引用文献>

Anonymous

1905a "Fancies and Phantasies", *Musical News* July 8th: 35-36.

1905b "Occasional notes", *The Musical Times* 46 (July): 453-455.

ANTCLIFFE, Herbert

1920 "The Recent Rise of Chamber Music in England", *The Musical Quarterly* 6/1: 12-23.

COBBETT, Walter Willson

1911a "The Violin Family and its Music", *English Music 1604 to 1904: being the Lectures given at the Music Loan Exhibition of the Worshipful Company of Musicians, held at Fishmongers' Hall, London Bridge, June-July, 1904*, 2nd ed., London: Walter Scott Pub.: 417-444.

1911b "British Chamber Music", *The Musical Times* 52 (April): 242-243.

1914 "A Chamber Music Causerie", *Chamber Music: A Supplement to The Music Student* 9 (July): 87-88.

1915 "Obiter Dicta", *Chamber Music: A Supplement to The Music Student* 17 (November): 27-31.

1916 "Obiter Dicta", *Chamber Music: A Supplement to The Music Student* 21 (July): 69-73.

1918 "More Plain Words", *The Musical Times* 59 (February): 62-65.

1929-1930 (ed.) *Cobbett's Cyclopedic Survey of Chamber Music*, 2 vols, London: Oxford University Press. 1929 (v. 1) "Preface", "Bridge", "Cobbett Competitions and Commissions", "Fancy", "Friskin": v-vi, 195, 284-288, 385, 437-438; 1930 (v. 2) "League of Arts", "Phantasy": 93, 217.

COLLES, H.C.

1927 "Fancy, Fantasie, Fantasy (Phantasy)", COLLES, H.C. (ed.) *Grove's Dictionary of Music and Musicians* (3rd ed.), London: The Macmillan: 2: 195.

DOLMETSCH, Arnold

1929 "Consorts of Viols" in COBBETT (ed.) 1929: 295-300.

FULLER-MAITLAND, John Alexander

1910 "Fancy, Fantasy, or Phantasy", FULLER-MAITLAND, J.A. (ed.) *Grove's Dictionary of Music and Musicians* (2nd ed.), London: The Macmillan: 5: 638.

MAW, David

2010 "Phantasy mania: Quest for a National Style", HORNBY, Emma; MAW, David (eds.) *Essays on the History of English Music in Honour of John Caldwell: Sources, Style, Performance, Historiography*, Woodbridge: The Boydell Press: 97-121.

PARRY, Hubert

1879-90 "Fantasia", GROVE, George (ed.) *A Dictionary of Music and Musicians (A.D. 1450-1889)*, London; New York: Macmillan and Co: 1: 503.

- 1904 “Fantasia”, FULLER-MAITLAND, J.A. (ed.) *Grove’s Dictionary of Music and Musicians* (2nd ed.), London: The Macmillan: 2: 6-7.
- ROSEN, Charles
1988 *Sonata Forms*, revised ed. New York : London : W.W. Norton & Co.
- SCOTT, Marion
1920 “Cobbett Music Competition”, *The Christian Science Monitor*, July 3, 1920.
- SEDDON, Laura
2011 *The Instrumental Music of British Women Composers in the Early Twentieth Century*, Ph.D. Thesis, City University London.
- STANFORD, Charles Villiers
1911 *Musical Composition: a Short Treatise for Students*, New York: Macmillan.
- TOVEY, Donald Francis
2001 “Frank Bridge”, *The Classics of Music: Talks, Essays, and Other Writings previously uncollected*, ed. by TILMOUTH, Michael: edition completed by KIMBELL, David and SAVAGE, Roger, Oxford: New York: Oxford University Press: 85-87. (初出は 1916 年)
- WALKER, Ernest
1915 “The Modern British Phantasy”, *Chamber Music: A Supplement to The Music Student* 17 (November): 17-27.
- THE WORSHIPFUL COMPANY OF MUSICIANS
1905 *The Worshipful Company of Musicians*, (2nd ed.), issued by the Livery Club of the Company for Private Circulation.

にしぎか たえこ

お茶の水女子大学大学院博士前期課程修了。現在、博士後期課程在学中(比較社会文化学専攻)。

